

日本の短編 下

中村光太郎 大江健三郎
太宰治 堀江青 堀江青
中村光太郎 堀江青
吉行淳之介 堀江青

中村光太郎 堀江青
太宰治 堀江青
中村光太郎 堀江青

日本の短篇 下

井上靖 大江健三郎 大岡信 清岡卓行
中村光夫 山本健吉 吉行淳之介 編

文藝春秋

日本の短篇 下

一九八九年三月二五日 第一刷

一九八九年一〇月三〇日 第二刷

編者代表 井 上 靖

発行者 豊 田 健 次

発 行 所 株式 会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印 刷 大日本印刷
製 本 大日製本

© Bungeishunju Ltd. 1989 Printed in Japan
ISBN4-16-363440-1

定価はカバーに表示してあります

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

夢十夜	夏目漱石	7
源おじ	国木田独歩	33
町の踊り場	徳田秋声	51
少女病	田山花袋	67
夜行巡查	泉鏡花	85
今年の秋	正宗白鳥	103
椿	里見淳	117
鮎	岡本かの子	125
どぶろく幻想	豊島与志雄	147
鷺江の月明	佐藤春夫	165
セメント樽の中の手紙	葉山嘉樹	183

慾呆け……………滝井孝作 189

ゼーロン……………牧野信一 205

一期一会……………網野菊 227

白い屋形船……………上林暁 247

晩菊……………林芙美子 261

黒猫……………島木健作 281

黒い裾……………幸田文 293

厭がらせの年齢……………丹羽文雄 317

華燭……………舟橋聖一 357

桜の森の満開の下……………坂口安吾 373

寒暖計……………椎名麟三 401

蜺

梅崎春生

423

顔の中の赤い月

野間宏

443

小銃

小島信夫

477

夢の中での日常

島尾敏雄

493

霊三題

阿川弘之

517

プールサイド小景

庄野潤三

529

詩人の生涯

安部公房

555

だらだら坂

丸谷才一

571

解説

栗坪良樹

589

日本の短篇 下

装幀 安野光雅

夢十夜

夏目漱石

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐つて居ると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな瓜実顔を其の中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、唇の色は無論赤い。到底死にそうには見えない。然し女は静かな声で、もう死にますと判然云った。自分も確に是れは死ぬなと思つた。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込む様にして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、只一面に真黒であつた。其の真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹る程深く見える此の黒眼の色沢を眺めて、是でも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじやなかうね、大丈夫だろうね、と又聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜た儘、矢張り静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云つた。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいって、それ、そこに、写つてるじゃあ

りませんか、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思つた。

しばらくして、女が又こう云つた。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。又逢いに来ますから」

自分は、何時逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それから又出るでしょう。そうして又沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待っていてられますか」

自分は黙つて首肯した。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云つた。

「百年、私の墓の傍に坐つて待っていて下さい。屹度逢いに来ますから」

自分は只待っていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んで居た。

自分は夫れから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘つた。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭い貝であつた。土をすくう度に、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿つた土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女を其の中に入れた。そうして柔らかな土を、上からそつと掛けた。掛ける毎に真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾つて来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長

い間大空を落ちてゐる間に、角が取れて滑かになったんだろうと思つた。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなった。

自分は苔の上に坐つた。是から百年の間どうして待つてゐるんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それが又女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて来た。そうして黙つて沈んで仕舞つた。二つと又勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつとせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。仕舞には、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなって丁度自分の胸のあたり迄来て留まつた。と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薔が、ふつくと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹える程匂つた。そこへ遥の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたつた一つ瞬いていた。

「百年はもう来ていたんだな」と此の時始めて気が付いた。

第二夜

こんな夢を見た。

和尚の室を退がって、廊下伝いに自分の部屋へ帰ると行燈がぼんやり点っている。片膝を座蒲団の上に突いて、燈心を掻き立てたとき、花の様な丁子がぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱっと明かるくなった。

襖の画は蕪村の筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近とかいて、寒むような漁夫が笠を傾けて土手の上を通る。床には海中文珠の軸が懸っている。焚き残した線香が暗い方でいまだに臭っている。広い寺だから森閑として、人氣がない。黒い天井に差す丸行燈の丸い影が、仰向く途端に生きてる様に見えた。

立膝をした儘、左の手で座蒲団を捲つて、右を差し込んで見ると、思つた所に、ちゃんとあつた。あれば安心だから、蒲団をもとの如く直して、其上にどっかり坐つた。

お前は侍である。侍なら悟れぬ筈はなからうと和尚が云つた。そう何日迄も悟れぬ所を以て見ると、御前は侍ではあるまいと言つた。人間の屑じゃと言つた。ははあ怒つたなと云つて笑つた。口惜しければ悟つた証拠を持って来いと云つてぷいと向をむいた。怪しからん。

隣の広間の床に据えてある置時計が次の刻を打つ迄には、屹度悟つて見せる。悟つた上で、今夜又入室する。そうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければ自刃する。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きて居る訳には行かない。奇麗に死んで仕舞う。

こう考えた時、自分の手は又思はず布団の下へ這入った。そうして朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐっと束を握って、赤い鞘を向へ払ったら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光った。凄いの
が手元から、すうすうと逃げて行く様に思われる。そうして、悉く切先へ集ま
つて、殺氣を一点に籠めて
いる。自分は此の鋭い刃が、無念にも針の頭の様に縮められて、九寸五分の先へ来て
已を得ず尖つて
るのを見て、忽ちぐさりと遣り度な
った。身体
の血が右の手首の方へ流れて来て、握っている束がにちゃにちゃする。唇が顫えた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけて置いて、それから全伽を組んだ。——趙州曰く無と。無とは何だ。糞坊主めと齒嚙をした。

奥歯を強く咬み締めたので、鼻から熱い息が荒く出る。米嚙が釣つて痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやった。

懸物が見える。行燈が見える。畳が見える。和尚の薬罐頭がありありと見える。鰐口を開いて嘲笑つた声まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬罐を首にしなくてはならん。悟つてやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云うのに矢つ張り線香の香がした。何だ線香の癖に。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云う程擲つた。そうして奥歯をぎりぎり
と嚙んだ。両腋から汗が出る。脊中が棒の様になった。膝の接目が急に痛くな
った。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。けれども痛い。苦しい。無は中々出て来ない。出て来ると思
うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜しくなる。涙がほろほろ出る。一と思に身を巨巖の上に打けて、骨も肉も滅茶々に碎いて仕舞いたくなる。

それでも我慢して凝と坐っていた。堪えがたい程切ないものを胸に盛れて忍んでいた。其切

いものが身体中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようと焦るけれども、何処も一面に塞がって、丸で出口がない様な残刻極まる状態であった。

其の内に頭が変になった。行燈も蕪村の画も、畳も、違棚も有って無い様な、無くって有る様に見えた。と云って無はちつとも現前しない。ただ好加減に坐っていた様である。所へ忽然隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はっと思った。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチーンと打った。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つて。髄に自分の子である。只不思議な事には何時の間にか眼が潰れて、青坊主になっている。自分が御前の眼は何時潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきは丸で大人である。しかも対等だ。

左右は青田である。路は細い。鷺の影が時々闇に差す。

「田圃へ掛ったね」と脊中で云った。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向ける様にして聞いたら、

「だって鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺が果して二声程鳴いた。

自分は我子ながら少し怖くなった。こんなものを脊負っていては、此の先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、脊中で、

「ふふん」と云う声がした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。只

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙って森を目標にあるいて行つた。田の中の路が不規則にうねって中々思う様に出不来ない。しばらくすると二股になった。自分は股の根に立つて、一寸休んだ。

「石が立つてる筈だがな」と小僧が云った。

成程八寸角の石が腰程の高さに立っている。表には左り日ヶ窪、右堀田原とある。闇だのに赤い字が明かに見えた。赤い字は井守の腹の様な色であつた。

「左が好いだろう」と小僧が命令した。左を見ると最先の森が闇の影を、高い空から自分等の頭の上へ抛げかけていた。自分は一寸躊躇した。

「遠慮しないでもいい」と小僧が又云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目の癖に何でも知ってるなと考へながら一筋道を森へ近づいてくると、脊中で、「どうも盲目は不自由で不可いね」と云った。

「だから負ってやるから可いじゃないか」

「負ぶって貰って済まないが、どうも人に馬鹿にされて不可い。親に迄馬鹿にされるから不可い」

何だか厭になった。早く森へ行つて捨てて仕舞おうと思つて急いだ。